2　　8ポ 18本組み　　3　1

周刊

竹屋の渡の弥三郎

—よろず覚え帖15—

子母沢 寛

一、

中泉の大庭平太郎は、清水の小政が死んでから、おかと夫婦になったんだが、甲府の吃安二代目へひどい金で流れて行ったのは、この女房がほれで、この女がしっかり者だから平太郎があれだけになった。

子分が失敗をやると、親分の前へ詫る前におかみのところへ飛んで行ってあやまっちまう。そしておかみから親分に詫て貰うと、よっぽど道にはずれた事でもなければ、「仕方のねえ野郎だっ」と叱られただけで許して貰えれ。尤も浮世の掟にはずれたことは、金輪際おかみが本気をして入れない。

平太郎はおかみのやっている貸座敷、読り女郎屋で設けたりが、死んで見ると、まるっきり金がないので、みんな、あれ程の親分だが、一万両の金ぐらいあがったという